

ソーシャルワーク実践につながるアイスブレイクの質問とは何か**—対話的な場づくりに寄与するアイスブレイクの考案を目指して—**

○ 立命館大学先端総合学術研究科一貫制博士課程 氏名 舘澤 謙蔵 (009843)

キーワード: アイスブレイク・ソーシャルワーク演習・ソーシャルワーク実践

1. 研究目的

本研究は、アクティブラーニング（以下、AL）の一環で行われるソーシャルワーク演習のグループワークにおいて、教員と学生の双方が取り組みやすく、学生同士および教員と学生との対話を促すアイスブレイク（以下、IB）を考案・提示することを目的とする。IBとは「見知らぬ複数の人がいる場所で硬い雰囲気壊すこと」であり、教育活動の場のみならず、市民活動の場、仕事の場、出会いの場でも活用され（今村 2014）、目的は具体的には7つあるが（青木 2013）、それらを集約すると「緊張緩和」「関係構築」「準備運動」の3つである（佐藤 2019）。

2. 研究の視点および方法

ソーシャルワーク演習は、グループワークやロールプレイなどを用いたAL型授業である。学生は講義形式とAL型授業の両方を重要視しているが、対人コミュニケーションへの苦手意識や抵抗感から、参加をためらう学生もいる（近田・杉野 2015）。学生の学習態度を能動的なものにするには、教員がこれらの心理的要因に対処する必要がある（三井・小林・榎井ほか 2024）。IBは、授業開始前の緊張を和らげ、安心して対話できる場を作る重要な実践である。

IBでは様々な種類の質問が用いられ、その範囲は簡単な質問から自己開示を要するものまで幅広い。開かれた場での発言自体に負担感が伴うため、質問の選択は重要である。単純すぎる質問は情報共有が容易な反面、印象に残りにくく（植松・田倉・後藤ほか 2024）、逆に斬新な質問は印象的だが、繰り返しの使用には向かない。

そこで筆者は、IBの質問の条件として、1) 簡便性、2) 発言の負担の少なさ、3) 印象の残りやすさ、4) 実践への応用可能性、5) 反復可能性を設定し、「起床時から現時点までの行動・出来事」を尋ねるIBを考案した。90分授業の制約上、授業冒頭での実施が重要である（佐藤 2019）。ソーシャルワーク科目の授業開始時に、この質問による自己紹介をIBとして実施した。まず筆者が目的と経緯を説明・実演し、その後、学生に試行してもらい、授業末にフィードバックを得た。

3. 倫理的配慮

本研究は、既存の文献および理論的枠組みに基づく検討が主たる研究方法であり、倫理審査は不要と判断した。なお、本研究は筆者が非常勤で勤務する大学の社会福祉学科学生に匿名で実施した、IBに関するアンケート結果を限定的・補完的に用いている。これに関しては、一般社団法人日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき、アンケートの研究利用

について事前に説明を行い、匿名性の確保や成績評価への影響がないことを伝えた上で、同意を得た学生の回答のみを分析の対象としている。また、本研究にCOIはない。

4. 研究結果

1回目のアンケートでは、「個性が伝わりやすいが緊張や記憶の負担がある」「1~1.5分程度が適切」「話し方の工夫で個性が現れる」「テーマ設定の工夫で話しやすくなる」「準備時間があると伝わりやすい」「『今日の私』などのタイトルが良い」という意見が出た。これらを踏まえてIBを更新し、「話を盛ることも可能」「無理に面白さを求めない」「時系列で話す」などを説明して2回目を実施した。2回目では、「時間制限がなく話しやすいが即興は難しい」「グループ分けや事前準備が有効」「効果には個人差があるが共通点を見出せる」「順序の工夫や無難な質問の追加が望ましい」「全体的に前回より円滑」との意見があった。今後は教員にも試行を依頼し、フィードバックを得る予定である。

5. 考察

先行研究と結果から、このIBの質問法は簡便で短時間での緊張緩和に効果があることが分かった。IBを通じて日常生活の一部を共有し省察することで、他者との接点や違いに気づき、関係構築につながる。教員も学生も、起床から現在までの行動を語ることで、各自の日常の固有性を実感できる。同じ質問でも日々の経験は異なるため、毎回新たな発見があり、互いの新しい一面に気づける。自己の生活史を語れるのは、その人自身だけである。また、教員自身も演習で緊張することがあるため、IBは場の緊張緩和に重要である。これはソーシャルワーク実践でも同様で、特にインテーク面接では、ソーシャルワーカーの緊張がクライアントに伝わり、話しづらくなることがある。そのため、クライアントとの関係構築の初期段階では、ソーシャルワーカー自身もIBを活用することが求められる。

引用・参考文献

- 青木将幸（2013）『アイスブレイク ベスト 50』ほんの森出版。
今村光章（2009）『アイスブレイク入門：こころをほぐす出会いのレッスン』解放出版社。
伊藤政英・高橋暁子（2024）「ブレインストーミングの活性化を図るためのアイスブレイク手法の設計」『日本教育メディア学会研究会論集』57（0），78-81。
近田政博・杉野竜美（2015）「アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識：神戸大学での調査結果から」『大學教育研究』23, 1-19。
松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター・溝上慎一ほか（2015）『ディープ・アクティブラーニング：大学授業を深化させるために』勁草書房。
三井規裕・小林珠子・櫛井亜依ほか（2024）「心理的安全性を考慮したグループ学習型授業が学生の学びに与える影響」『日本教育工学会研究報告集』2024（4），296-299。
内藤知佐子・宮下ルリ子・三科志穂（2019）『学生・新人看護師の目の色が変わるアイスブレイク 30』医学書院。
佐藤智子（2019）「アクティブ・ラーニング型授業におけるアイスブレイクの意義と方法」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』5, 203-212。
植松涼介・田倉悠人・後藤匠・宮田佳美（2024）「「架け橋ゲーム」の改良と試遊によるアイスブレイクの効果の検証」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』71（0），534。